

## 連載 プロマネの現場から

### 第 82 回 『県居大人（あがたいうし）』のおさとし・・賀茂真淵の教え

蒼海憲治（大手 SI 企業・金融系プロジェクトマネージャ）

日本橋のオフィスからほど近い、都営地下鉄新宿線の浜町公園駅から少し歩いた久松町交差点にファミレスがあり、その壁面に、一枚のプレートが貼ってあります。プレートには、「賀茂真淵（かものまぶち） 県居（あがたい）の跡」とあります。この地は、250年ほど前、国学における四大人（うし）の一人であり、本居宣長の師でもある賀茂真淵が晩年に住まいを構えたところ です。

ところで、これまで、真淵についての私の理解は、「玉かつま」での本居宣長を通してのものでした。宣長さんが、真淵の『冠字考』を手にとり、はじめのうちはよくわからなかったが、何度も繰り返し読むうちに、その内容の画期的な凄さに大感激する。そして、ある日、松阪の町中にあるいつも通っている古本屋さんに立ち寄ると、さきほど賀茂真淵先生がきていた、ということ を耳にします。しかし、その時は、すでに真淵一行は、お伊勢参りに出発した後でした。でも、伊勢からの帰りにもう一度、松坂を通るため、その機会を待ちわびます。

この後の対面は、「松阪の一夜」として名高い場面になります。「玉かつま」の2つの文章から、佐佐木信綱が創作したこの物語は、戦前は『尋常小学国語読本』にも取り上げられるほど有名でしたが、いま読んで感動します。

新上屋の一室で、七十歳近くになり、すでに国学の大家となっていた真淵と、まだ30過ぎたばかりの宣長は対面します。

「私はかねがね古事記を研究したいと思つてをマります。それについて何か御注意下さることはございますまいか。」と宣長が問うたのに対して、

真淵はこう答えます。

「それはよいところに気がつきました。私も実は我が國の古代精神を知りたいといふ希望から、古事記を研究しようとしたが、どうも古い言葉がよくわからないと十分なことは出来ない。古い言葉を調べるのに一番よいのは萬葉集です。

そこで先づ順序として萬葉集の研究を始めたところが、何時の間にか年をとつてしまつて、古事記に手を延ばすことが出来なくなりました。あなたはまだお若いから、しつかり努力なさつたら、きつと此の研究を大成することが出来ませう。たゞ注意しなければならないのは、順序正しく進むといふことです。

これは學問の研究には特に必要ですから、先づ土臺を作つて、それから一步一步高く登り、最

後の目的に達するやうになさい。」

この日以後、真淵と宣長は、再び会うことはありませんでした。しかし、真淵が亡くなるまでの数年間、通信教育ともいふべき文通を始めます。そして、真淵の死後も、宣長は研究を続け、実に35年かけて、『古事記伝』を完成させました。

人の一生の中で、「松阪の一夜」のような出会いが一度でもある人はいかに幸運であることか。また、そのためには、常日頃からの準備がそれ以上にいかに大切であることか、と思います。

この二人の往復書簡（\*1）は多数残っていますが、印象的なのは、やはり、真淵が宣長を叱責する明和三年九月十六日の手紙です。

「詠歌の事よろしからず候、既にたびたびいへる如く、和歌は巧みなるいやしといふは、よき歌の上にてても、言よろしく心高く調子を得たるは、少しも巧の無きぞよき也、それにむかへては、よき歌といへど、巧みあるはいやしき也、まして風姿にも意の雅俗にもかかはらで、只奇言薄切の意をいへるは、総て論にも足らぬ事也、」

と、宣長さんの歌を、厳しく叱責しています。

真淵先生自身は、

「古代の歌を見て、一毫も後世を不用して年月を経るままに、自然に古雅我心中に染也、其上にて後世を顧ときは、其善悪雲泥の違有、故に誰に問に不及古雅に向へり、」

という気持ちでいるのに、宣長さんの歌は、古代ではなく、いまふうになっている。

「貴兄はいかで其意をまどひ給ふらんや、前の友有ば捨てがたきとの事聞えられ候は、論にも足らぬ事也、」

「いはばいまだ万葉其外古書の事は知給はで、異見を立らるるこそ不審なれ、か様の御志に候はば向後小子に御問も無用の事也、」

「惣て信じ給はぬ気願はなれば、是までの如く答はすまじき也、しか御心得候へ、」

万葉の心を信じられないとの異見を述べ、質問を繰り返すのであれば、以後、質問無用、とバツサリでした。

しかし、これに対して、宣長さんも誠心誠意謝り、文通は再開します。

明和四年十一月十八日の真淵からの書簡では、丁寧に『古事記』のこと他の説明がされています。

「一、万葉再問、委傍書いたし進候、御覧可也候、  
一、古事記之事致承知候、」

橋本治さんは、小林秀雄の『本居宣長』を論じた『小林秀雄の恵み』において、真淵が叱責した一見タメ口のような宣長さんの和歌について、こう解釈しています。

当時において、和歌こそ、敬語を使わずに相手に自分の気持ちを伝える唯一の手法だった。つまり、宣長さんの和歌に、万葉だ古今だといった作為はもうとうなかったのではないか。むしろ、宣長さんの古今・新古今がかった下手な歌は、親愛の表れだったのだ、といいます。

ところで、真淵自身の業績について、その学問のアプローチ方法が高く評価されています。

「賀茂真淵は『万葉集』を中心とした古典研究と和歌の世界で活躍し、独自の学問世界を作り上げました。

真淵は、古典研究においては『万葉集』の重要性を、また和歌においては『古今和歌集』以来の技巧的な歌風より、古代の素朴でおおらかな万葉調の歌風を尊重しました。

つまり『万葉集』の自然に帰ることと、天地自然の道である古道の大切さを説いております。」 (\*2)

「真淵は『延喜式祝詞解（えんぎしきのりとおかい）』序・付記に、『古事記』と『日本書紀』を比べて、次のように述べています。

「古史に引（ひく）に古事記を先とし、日本紀（にほんぎ）を次とす。

日本紀は・・漢文に泥（どろま）みたらば、上古の事実に違ふもの多し。

・・古事記は上古質直の国史なり。

かつ国語を専（もっぱら）としたれば、上古の風を見、古語を知り、古文を察するに及ぶもの無（なか）ればなり。」

当時は『日本書紀』が正史として尊ばれていましたが、真淵がはじめて『古事記』を『日本書紀』の上位に置き、学問の最高の対象としました。」 (\*2)

また、内藤湖南は「賀茂真淵翁と山梨稲川先生」（『先哲の学問』所収）において、こう述べて

います。

「国学上における賀茂真淵は非常な大家でありまして、この浜松には深い縁故をもった大先生であります。その学問の方法というものが山川稲川先生の学問の方法と相類似して居るという関係があるのであります。」（\*3）

その独創的な方法は、

「それはつまり古典の学問の上に立派な基を開かれたということでありまして、古典の研究に言語の研究を基礎とする、すなわち言葉を土台として古典を研究するという特別の方法を案出せられたということでもあります。」（\*3）

「賀茂真淵の学問は学統を荷田春満から受けておりますが、その学問の方法はちがって居るのであります。」（\*3）

春満の学問の特色は、制度すなわち律令格式という、支那の制度を復興するのが目的だった。

「しかるに賀茂翁は独創の見識を以て古典の研究を始められたのであります。」

『日本紀』（『日本書紀』）や『古事記』の研究をするには、どうしても言葉の研究は古語の研究に始まらねばならぬというので、それで言葉を研究し始めたのであります。」（\*3）

弟子の宣長さんが、係り結びを発見し、五十音図を完成させたのですが、それに先立ち、真淵の古語研究があったからこそ、『古事記』の解明につながったのだと思います。

「賀茂翁もその一生を『万葉集』とか祝詞とかいうものの言葉の研究に費やして、古典の研究には手がとどかなかったのであります。その目的が古典の研究にあったということは明らかであります。」

本居（宣長）翁に至って『古事記』の研究を大成いたしたのは、その志を継いだのでありまして、だんだんに発展して今日の国学を成すに至ったのであります。

これは支那・西洋等に起った近代の学風に符合して居るのであります。」（\*3）

ところで、真淵は、八代将軍徳川吉宗の次男、御三卿の一人である田安宗武に仕え和学を講じ、生活が落ち着いた後、現在の私の職場近くの日本橋茅場町に居を構えた、といひます。そして、さらに、明和元年（1764）7月、真淵68歳の夏、かねてから抱いていた移転の願ひがかない、冒頭紹介した日本橋浜町に居を移して、この新居を県居（あがたい）と呼びました。

「おのれの氏（うじ）は加茂、  
かばねはあがたぬしなれば、  
をる所をあがたゐといふなり。  
あがたとはゐなかの心地。」

と真淵自身が注釈していますが、賀茂神社の神主は「県主」の姓（かばね）を持ってよぶならわしであったこと。また、「あがた」とは、田舎住まいを意味しました。

真淵自身は、繁華な江戸の町中に身を置きながらも、庭を田舎風に作り、古里である浜松の田舎に思いを馳せ、素朴な古代生活を体現した、ともいわれています。この場所で、県居の翁と自称した真淵は、隠居後も益々盛んで、『万葉考』『歌意考』『祝詞考』等を著しました。

実際の旧跡は、プレートのある場所から北東約100mのあたりにあったようですが、この辺り一帯は、第二次大戦の終戦直後は、一面焼野原ですべて焼き払われています。大きな道路の交差点の一画にあるこの看板を眺めながら、250年前の田舎住まいの様子をまぶたの裏に夢想するのでした。

（\*1）賀茂真淵&賀茂真杜『賀茂真淵全集 第23巻 県居書簡他』続群書類従完成会、1992年刊

（\*2）『子供寺子屋「親子で学ぶ偉人伝」』（巻2）、監修：荒川春代・荒川和彦、明成社、2008年刊

（\*3）内藤湖南『先哲の学問』（ちくま学芸文庫）